



時間と空間を超えてきた資料が
北の文化を話しはじめる

北方民族博物館はユーラシア、北アメリカ、
グリーンランドの先史時代から現代まで、
北方文化を対象とする博物館です。

湧別町川西遺跡の発掘について

私たちは調査研究事業の一環として、道東部におけるオホーツク文化の集落と住居構造の解明をテーマに、6月下旬から7月にかけて網走管内湧別町に所在する川西遺跡において発掘調査を行いました。発掘後の整理作業は、現在当館において進めているところですが、以下に遺跡の概要と、本調査の概要について記すこととします。

遺跡の立地

湧別川はオホーツク海に注ぐ河川としては常呂川に次ぐ大きさをもっています。この川は大雪山系の天狗岳、チトカニウシ山付近に源を発し、途中いくつかの河川を併せながら海に注いでいます。上流部には我国最大の黒曜石の原産地を擁していることもあり、湧別川の流域には著名な先史時代の遺跡が数多く知られています。

河口に形成された町、湧別町も遺跡の分布の密度は高く、早くから研究者の間で知られた遺跡があります。湧別川の右岸では石刃鉄文化を代表する湧別市川遺跡、左岸では縄文時代前期の標式土器を出土するシブノツナイ遺跡、擦文時代を主体として600を超える竪穴住居跡がみられる北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡などがあり、これらはいずれも海岸部の低地帯を臨むなだらかな沖積地に立地しています。

今回私たちが調査の対象とした川西遺跡はシブノツナイ竪穴住居跡群に隣接し、海岸線から1.2

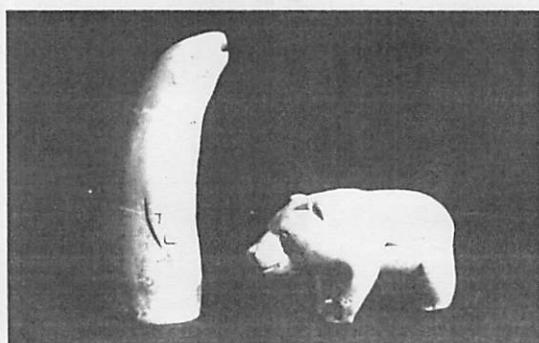


写真1

キロメートルほどへだたり、湧別川の一支流センサイ川に面した段丘端にあります。

過去の調査

この川西遺跡は、当時網走市立郷土博物館長であった米村喜男氏らオホーツク文化研究会の手によって昭和35年に一部発掘されています。このときにはオホーツク文化の竪穴住居跡2か所、擦文文化の竪穴住居跡1か所が発掘調査され、報告がまとめられています（昭和36年「川西遺跡調査報告」網走郷土博物館シリーズⅠ）。このときの調査では第2号竪穴としたところから、牙製の「熊の丸彫りとシャチ鯨の胴部より上方の丸彫り」が発見されました（写真1）。これらの出土した丸彫り品を手にとった米村氏は思わずバンザイし、すぐさまポケットに入れられたため現地では見せてもらえず、宿舎に帰ってからやっとのこと見せてもらうことができた、当時の発掘を知る人たちの間にエピソードが残されるくらい貴重な発見でした。

この調査以来川西遺跡はさしたる調査もなされることなく、土地所有者である伊藤務氏によって、竪穴のくぼみがそのままの状態で見られる遺跡として保存されてきました。

遺跡の全体像

発掘に先立つ遺跡全体の地上測量で確認した竪穴住居跡と思われるくぼみは50か所でした（遺跡全体面積は約7千平方メートル）。くぼみの平面形が矩形かそれに近いものは40か所、他は多角形



湧別町の位置

で概して矩形のものより大きな平面をもつものがあります。前者は擦文文化、後者はオホーツク文化の所産と考えられます。このうちオホーツク文化期の堅穴は、特定の範囲に固まるようにみられました。また西側に隣接する均^なされた草地にも僅^{すく}なくほみが点在していることから、ここにも堅穴の分布が及んでいたことが分かりました。

3号住居跡の発掘

今回は遺跡の南側に集中して認められるオホーツク文化の堅穴住居跡のうち1か所を発掘しました。そこは米村氏らがかつて調査したものに接する位置にあたり、調査の対象とした堅穴を3号住居跡としました(写真2)。この発掘結果を次のようにまとめてみました。

・堅穴床面の平面形はほぼ六角形を呈し、長軸を川の方角に向いている。長軸長は約8メートル、それに直交する短軸長は約6.5メートル。

・地面を50センチメートルほど掘り下げ、床面を作っている。床中央には石で囲った炉を設け、周囲の床面には粘土が貼られていたとみられる。

・壁に近い床面上には焼土がほぼ全周にわたって認められることから、火災に遭って焼失したもの

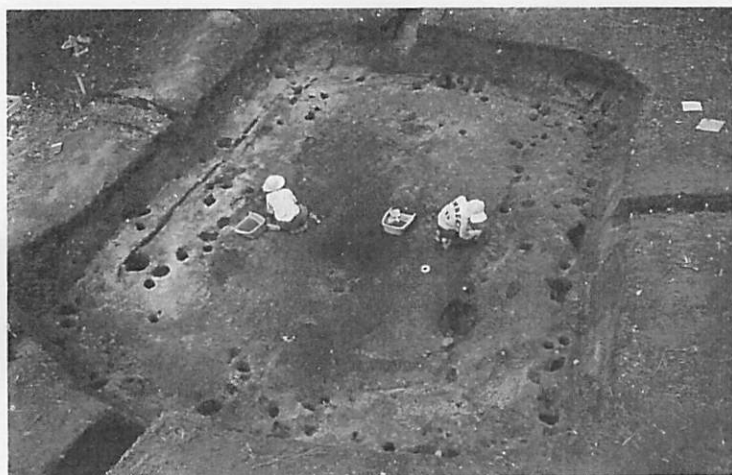


写真2

と考えられる。

・長軸線上の床面の一端に動物骨の集積場がみられた。しかしこれは残念なことにのちに乱され、大部分が掘り返された様相を示していた。

・床面上、覆土中から遺物が検出された。床面では貼付浮文土器(いわゆるソーメン文土器)、数個体分の破片、骨製の回転式およびかえり式鉋先、骨斧、牙製(?)の有孔円盤、石鏃、たたき石などがみられた(写真3、4)。

今回の調査については、今年度内に概要を報告する予定です。

(学芸課 青柳 文吉)

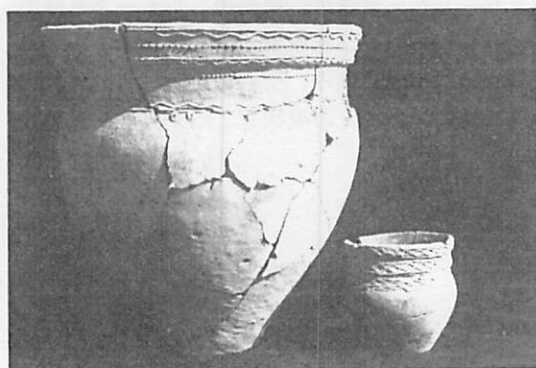


写真3

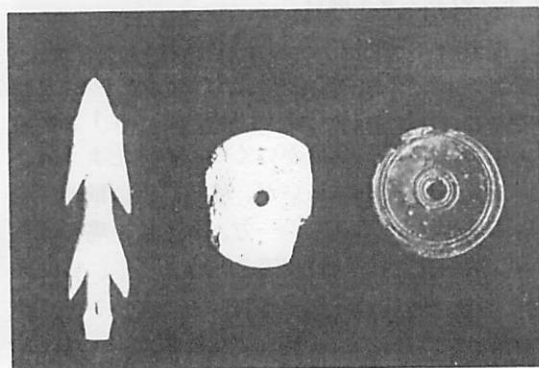


写真4

○平成3年度第1回講演会

シベリアのトナカイ遊牧民

講師 / 大阪大学助教授 佐々木 史郎氏

平成3年度上期の特別展『シベリアのトナカイ遊牧民 ネネツ展』は、北部ユーラシアに広く分布するトナカイ飼育民のなかでも、とくに進んだ飼育技術をもつネネツに焦点をあて、7月21日から8月24日の会期で開催されました。関連事業の一つとして7月28日に開催された講演会では、特別展図録に寄稿をいただいた大阪大学の佐々木先生を講師に迎え、トナカイ飼育文化の起源や西シベリアのネネツのトナカイ遊牧の実態など、スライドを交えた興味深いお話をうかがうことができました。以下にその要旨を紹介します。

トナカイ飼育の起源と大規模遊牧

トナカイはアメリカ大陸起源の寒冷地に適応した動物として、新旧大陸のツンドラとタイガに分布し、ヨーロッパでは少なくとも5万年前からトナカイ狩猟が行われ、古くから重要な狩猟獣であった。その後、ユーラシアではトナカイ飼育文化が生れ、タイガとツンドラの民族に広く受け入れられた。これらトナカイ飼育の起源には狩猟起源説や馬飼育・遊牧影響説など諸説があるなかで、C. H. バインシュティンの南シベリアのステップ地帯における馬飼育に起源を求めた仮説が今のところ有力と考えられている。北部ユーラシアでは狩猟・漁撈を基本的生業形態とするなかで、トナカイの利用はタイガにおける荷駄・騎乗とツンドラでの橇牽引にとどまっていた。18世紀中頃から、大規模なトナカイ遊牧がツンドラに生れ、それらの大きな要因として帝政ロシアの支配による毛皮獣確保のための活動があげられる。

ネネツのトナカイ飼育

代表的な大規模トナカイ遊牧民族として東シベリアのチュクチ、西シベリアのネネツがあげられるなかで、歴史的にみてもチュクチでは1万頭以上を所有している家族がいくつもあったように、たしかに飼育頭数は多いが、放牧技術は稚拙で粗放な遊牧を行ってきた。一方、ネネツの場合は、群れの管理や牧畜技術が確立されていて、完成された飼育文化に到達しており、ネネツのトナカイ飼育にこそ、トナカイ飼育文化の本質をみること



ができる。

各民族のトナカイの飼育方法や利用方法は、地域や伝統文化の違いから異なり、群れの大小、牧犬の有無、害虫の駆除方法、去勢方法、搾乳の有無、橇の形状、騎乗鞍の有無または型、荷駄鞍の有無または型などの諸特徴の違いや共通性から、5つのグループに分けられている。ネネツはエネツやハンティと同じサモディー型グループに属し、傾斜支柱型の橇の利用、牧犬を利用した大規模遊牧や放血方法による去勢などの飼育特徴をもっている。

現在の遊牧生活

さらに、最近調査をされたネネツのトナカイ遊牧の現状について多くのスライドを用いてご紹介いただきました。西シベリアのナリヤンマル周辺やバイガチ島におけるネネツの遊牧サイクル、移動やキャンプ地の様子、橇の製作、テントの内部、食事内容などツンドラの遊牧民の生活と自然を解説されました。最後に、現在のホルホーズ単位での遊牧に触れ、定住化政策が進んでいることから、人びとは市街地に住み、交替で遊牧に当たっていることなど、ネネツの現状をご紹介いただきました。

○平成3年度第2回講習会

民族映像の現状

講師／エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ日本代表

岡田 一男氏

現代は映像の時代とも言われ、テレビ放送の電波は地球の隅々にまでとどく時代となっています。博物館の展示や解説の手段にも映像が利用され、当博物館でも実物資料とともに、北方諸民族のさまざまな文化を伝える映像が展示の重要な部分を構成しています。9月8日に開催された講習会では、民族誌映像の調査・収集に携わってきた映像作家、岡田一男氏を講師に迎え、民族誌の記録映像の歴史や現状、課題について、代表的な映像のサンプル上映を交え、お話しいただきました。以下にその要旨をご紹介します。

映像の誕生と民族誌の記録映像

1895年に初めてスクリーン上に公開映写された「映画」は、民族学者の記録手段として大変速やかに採用された。19世紀末から盛んになった北極探検にも映像機材が携行され、極北の民族の調査記録に応用された。初期の映像機材は、大きく重く、フィルムの低感度や寿命の短さなど、極めて取扱いが難しいものであったにもかかわらず、熱心な記録がなされ、今日ではみられない貴重な北方の民族誌が、このような無声映画期に記録された。

民族映像の現状と課題

映像技術の進歩や1960年代後半から始まったカラーテレビジョンの普及は、民族誌映像を含むドキュメンタリー番組の制作を促した。しかし、学術研究や高等教育を対象とする映像資料とテレビ放映を前提とする映像制作には相入れないものがあり、これらの問題を解決するために、映像国際シンポジウムの開催などを通して関係者の相互理解を深めることが重要である。

かつては、しばしば略率的な記録活動が行われてきたが、記録するものとされるものとの間に相互に信頼関係が確立されている必要があり、カナダではイヌイト共同体と映像制作者間で相互信頼に基づく契約が交わされている。

衛星放送の登場とともに、あらゆる地域に中央放送の電波が到達し、先住民の伝統文化の破壊が



懸念されはじめています。そのため、アラスカやカナダでは、イヌイト独自の放送局が政府の援助で設立され、イヌイト自身の制作によるイヌイト語を用いた番組の放送が行われ、さらに伝統文化の消滅を防止するための記録保存が、これらの映像制作を通じて図られている。

最後に、ソ連の現状に触れ、シベリアの油田開発などにともなう自然破壊が民族の生活に影響を与えている現状や先住民出身の映像作家に対する期待が述べられ、民族誌映像について、今日的課題に対する解決策を含む多くの指摘、示唆に富んだお話しをうかがうことができました。映写された映像は次のとおりです。

- * 「極北への旅」 S.パルシー、Finland, 1985, 1917-18年のチュコト半島、カムチャツカの記録
- * 「夢見の時代」 A.スラーベンシュ、Latvia, 1982/90, V.K.アルセーニエフらによる1927年の沿海州のシャマニズムの調査記録
- * 「ナヌーク」 R.フラハティ、U. S. A. 1925, 日本では「極北の怪異」の題で公開された、カナダ・セントラルイヌイトの記録
- * 「白老アイヌの生活」 八田三郎、Japan, 1925, 北大の動物学教授八田三郎が制作したもの
- * 「イヌイト放送」のデモテープ、カナダのイヌイト独自の放送
- * 「ストーリーナイツ」 KYUK-TV, U.S.A., 1985, イヌイトの伝統文化を子供たちに伝える様子
- * 「冬の太鼓」 ANHFP, U.S.A., イヌイトの芸能、社会生活、記録する側とされる側の相互理解に基づく映像
- * 「カギーク」 Fleming Art, Canada, 1989, イヌイト自身による映像
- * 「ラブンメデヌー」 トゥイ・イ・ヤー、ソ連、ユカギール出身のV.パルフォーノフが自らの民族を記録した作品

○平成3年度第3回講座

トナカイの社会誌～北欧サミの生活

講師 / 聖心女子大学講師 葛野 浩昭氏

特別展の会期も半ば、8月10日(土)には葛野浩昭先生を迎えて、北欧の極圏に暮らすサミの文化・社会の伝統と現代についての講座を開催しました。先生は1985年から約1年半にわたってラップランドのウツヨキ地域で調査をされています。以下に講座の要旨をご紹介します。

生業に見られる四位一体的構造

「ラップランド」という言葉は、日本人にとって“サンタクロースの故郷”＝“トナカイ遊牧”のイメージがあり、実際、それを売り物に観光開発の進んでいる地域でもある。

しかし、大規模なトナカイ遊牧が誕生したのは、シベリアと同じ18世紀頃でその歴史は浅く、遊牧民化したサミ人も全体のごく一部にすぎない。厳しい環境を生き抜くためには、個々人がトナカイ飼育、採集、狩猟、漁撈の全てを季節的に行うか、社会の中で分業（スミワケ）をする必要があった。ウツヨキの統計資料や家系図などから、世襲制の分業としてトナカイ飼育が行われていたことが分かっている。

スノーモービル革命

1960年代後半～70年代初期にかけて導入されたスノーモービル等の動力は、生業の内容・構造をはじめ、さまざまな変革をもたらした。トナカイ飼育では、秋と冬の追い込み以外は日帰り作業になり、追い込み自体もオートバイで行うことによって、トナカイの習性など伝統的な放牧知識と、トナカイを分類する言葉も消滅していく状況にある。また、例えばワナは、スキーで行っていた時

代、時間と体力を節約する意味からもベースとなるキャンプ小屋から出発して、再びそこにもどる環状の道筋に仕掛けられていたが、スノーモービルになると、機動力を活かし、小屋の位置にこだわらずワナを掛けられるなど、採集・狩猟ではその空間的構造が面的なものから線的なものに変容していった。

さらに、騒音が妊娠しているトナカイにストレスを与えるなど、狩猟・漁撈民とトナカイ飼育民との間でいさかいが起きたり、同じ飼育民のなかでも、スノーモービル等を導入した時期による飼育頭数の格差が生じるなど、生業上のスミワケが乱れつつある。

民族的アイデンティティとしての物質文化

スノーモービルの普及は、伝統的物質文化の喪失も加速させた。毛皮コートは化繊のつなぎ服になり、携帯食や遊牧民の象徴でもあるテントも不要になるなど衣食住全般が変容した。また、観光土産と称して、サミの物質文化を模造したものも氾濫し始めた。

このようななか、サミ人自身の間で物質文化のリバイバル運動が高まり、言語と共に彼らの民族的アイデンティティに深く関わるものとして重要視されてきている。

スライドや投げ縄の実演など1時間半エネルギーな講義をいただき、さらにその後、特別展示室で物質文化に関する解説もいただきました。ボート型の橇がトナカイの歩幅（肩幅）に合っており、スノーモービルでひくには適さないこと、作られる物によってトナカイの角の部位が細かく使い分けられていることなどのお話を伺うことができ、参加者からの質問・応答などもありました。

フィールドワークの体験を元に、本などでは学べない貴重な話題をお聞きすることができ、また、日本製のオートバイとスノーモービルが、遠く北極圏の地で伝統文化にこれほどの影響を与えていることを、身近に考えさせられた講座でした。



特別展示室で

「北海道の歴史と文化の理解に欠かすことのできないアイヌ文化に対する認識を深め、保存を図っていく」ことを目的として、アイヌ民俗文化財専門職員等の研修会が白老町コミュニティセンター、アイヌ民族博物館を会場に行なわれました。回を重ねて今回6回目というこの研修会は、第1日、2日が講義、第3日目が資料見学という日程でした。このうち講義は以下の方々によってなされました。千葉大学・中川裕氏、札幌医科大学・百々幸雄氏、北海道教育大学・進藤貴美子氏、札幌学院大学・奥田統己氏、函館市北方民族資料館・長谷部一弘氏、早稲田大学・菊池徹夫氏、根室市博物館開設準備室・川上淳氏。

中川氏は、日本語と比べると方言差の少ないアイヌ語の音の構造、文法、語い比較を通してそれぞれの地域性を述べました。また6年間にわたってアイヌ古式舞踊の調査に携わって来られた進藤氏からは、伝統的な生活から生まれた踊りの構造と、それに表われた民族の心の理解が強調されました。長谷部氏は国指定の民俗文化財・馬場脩コ

アイヌ民俗文化財専門職員等研修会

9.11～13 於：白老

レクシオンについて、収集時の背景とそれにまつわるエピソードに触れ、大英博物館からも引き合いを受けたという同資料が、市立函館博物館に所蔵される過程を紹介されました。菊池氏は、高校において北日本の歴史がどのように教えられているかについて、日本史教育に使用されている教科書での実際的な扱われ方を紹介され、その分析から画一的な中央に片寄った記述ではなく、地域の歴史を正確に把握できるものにすべきと説かれました。

3日目はアイヌ民族博物館において、同館学芸部長・豊原照司氏から収蔵資料について説明があり、館の目指す方向性についても語られました。このあと映画「白老アイヌの生活」（1925年）の上映、資料見学が行なわれました。

（学芸課 青柳 文吉）

21世紀への北海道の指針と可能性を考える第8回北の文化会議（同会議・北見市・北海道新聞主催）が、北見市の開基95年、市制施行50年記念行事の一環として、北見市民会館でおこなわれました。作家・村松友視さんの基調講演に続き、産業、文化、スポーツ、都市計画など7つのテーマの分科会が開催されました。

分科会の一つ「北のクロスロードを探る」では、まずはじめに座長の岡田宏明氏（北海道大学教授）が、先史時代からの北海道と大陸との関わりについて説明しました。また、アメリカ、カナダ、ソ連の博物館の協力によりおこなわれている、北方民族の文化を一堂に会した、移動展「新旧両大陸の交差路(Crossroads of Continents)」の内容が紹介されました。

これを受けて、若濱五郎氏（北海道大学名誉教授）からは、自然環境の視点より、北海道のオホーツク海沿岸とアラスカなどの北方圏との共通性が説明され、北海道は日本の最果てというよりは北方圏の南端であることが強調されました。

北の文化会議 '91オホーツク

9.18 於：北見

竹田津実氏（動物写真家）、伊藤公平氏（オホーツク文化資料館事務局長）はそれぞれの専門分野である動物、植物の視点から、やはり北海道は北方の生物の南限であることを示唆しました。

渡部裕（当館学芸課長）は、民族学の立場から北方地域の諸民族の文化を紹介したあと、北海道の先住民族であるアイヌの生業形態について触れ、それが環北太平洋のサケ釣り文化圏に属していることを説明しました。また、寒冷地に生きるための、北方民族の文化的な適応の素晴らしさも強調しました。

討論の中で、自然と共存して生活してきた北方民族の知恵を、自然破壊の問題の解決に利用できないか、また現代文明の中で伝統文化を正しく継承していくのは難しいなどの意見が出されました。

そのほかの分科会も、各会場で平行しておこなわれ、パネラーを囲んださよならパーティーのち閉会となりました。（学芸課 佐々木 亨）

○ふるさと体験学習講座

北方民族の「おもちゃ」をつくろう

講師／笹倉 美（当館学芸員）ほか

網走の21世紀を担う青少年の育成を目的とする、山田記念青少年育成財団のふるさと体験学習講座の一つとして、市内の小学3～6年生38名が参加して、北方民族の「おもちゃ」づくりが当館との共催で行われました。

はじめに、子供たちは博物館について簡単な説明を受けたあと、およそ1時間かけて常設展示室を観覧しました。これからつくるイヌイトの「知恵の輪」と「うなり板」を展示しているコーナーやグリーンランド・イヌイトの1年間の生活の様子を紹介しているマジックビジョンのまえでは、熱心に資料や映像を見入っていました。

このあと、当館学芸員から「おもちゃ」のつくり方を教わり、さっそく製作にかかりました。「知恵の輪」は木の板とひもとビーズを使い、簡単に作れるおもちゃですが、それを解くのはそう簡単ではありませんでした。学芸員からの説明を聞いては、何度もやり直す子供もいました。



もう一つの「うなり板」は、木片の縁にカッターで刻みを入れて、ひもをつけて出来上がりです。中庭に出て、完成した「うなり板」を勢いよく回してみると、プーン・プーンと音を立ててうなりだし、まずは成功でした。

このような体験学習を博物館でおこなうのは、今回がはじめてで、受入れ側として多少の戸惑いもありましたが、童心にかえり子供たちと一緒に遊んだ楽しいひとときでした。

「北方民族展」や「近代白老アイヌのあゆみ」など、精力的な企画展を行なっているアイヌ民族博物館（白老町）では、今年度の企画として「アイヌの衣服文化展」が開催されました。

9月10日にはこの企画展を記念したシンポジウムが同館の主催で行なわれました。同館特別研究員・児玉マリ氏はじめ札幌稲西高校教諭・中村和之氏、北海道大学附属博物館主任・難波琢雄氏、口承文芸学会理事・萩中美枝氏によって、アイヌの衣服に関わるそれぞれの専門的立場からの興味深い講演がありました。まず児玉氏は、アツシを始め和人社会から流入する木綿を使った様々な衣服を説明するなかで、内浦湾沿岸で採集されたルウンペ（色布で切伏文様をつけた衣服）にある切伏文様はアムール下流域、北部サハリンのニブフの魚皮衣につけられた文様に極めて似ていること。またサハリン・アイヌの衣服に施された刺しゅう

「アイヌの衣服文化」シンポジウム

9.10 於：白老

に表われた繊細な手法の背後には、大陸からの影響を見逃すことはできないという。次にいわゆる山丹^{さんたん}交易でもたらされた中国の官服、山丹服について中村氏は、現存する実物の資料、文献資料の分析から、アイヌにとっての山丹服は、和人との交易を主目的として大陸から手に入れていたこと、服以外に反物という形で手に入れた可能性をも指摘された。またアイヌにとって山丹交易の主目的は青玉を入手することだったのではともいう。難波氏は、アイヌ衣服の素材について、とくに樹皮衣の素材となるオヒョウ皮、シナ皮の採集から繊維を取り出すまでの過程を克明に報告しました。とくにシナ皮の処理については新潟県の山北地方にみられるシナ布との比較研究の必要性を強調されました。萩中氏は、アイヌのユーカラの中に表われる針仕事の情景や、きものを着ようすなどは女性を物語った部分に多く認められることを紹介されました。ここには日本語の直訳には表われないアイヌ女性の知恵や生活感があふれているといえます。

(学芸課 青柳 文吉)

寄贈資料紹介

○石皿、すり石

中標津町の長屋利夫氏より、羅臼町トビニタイ遺跡出土の石器2点が寄贈されました。

○サハリン少数民族関係写真

札幌市の納谷忠久氏より、サハリンのウイльта、ニブフ、アイヌ等に関する写真74枚が寄贈されました。

執筆ならびに出版社より

贈呈をうけた書籍(6月~9月)

池上二良解説『ウイльтаの暮らしと民具』1982

池上二良編『川村秀弥採録カラフト諸民族の言語と民俗』1983

池上二良採録・訳注『ウイльта口頭文芸原文集』1984

池上二良編『ウイльта民俗語彙』1985

池上二良編『「ぎりやーく・おろっこ器物解説書」、北川源太郎筆録「ウイльтаのことば」(1)』1986

池上二良編『ウイльта語生活語彙』、田中淑乃『ウイльтаの刺繍』1989

池上二良・津曲敏郎訳解『北川源太郎筆録「ウイльтаのことば」(2)』1988

池上二良・津曲敏郎訳解『北川源太郎筆録「ウイльтаのことば」(3)』1990

池上二良・津曲敏郎訳解『北川源太郎筆録「ウイльтаのことば」(4)』1991

以上、網走市北方民俗文化財保存協会宮田登著者代表『黒潮の道(海と列島文化7)』小学館 1991

米村哲英編著『浜佐呂間I遺跡・HS-05遺跡』佐呂間町教育委員会 1991



「金沢少年の翼」一行



司馬遼太郎氏(左)

主な来館者

7/7 中国瀋陽市人民対外友好協会代表訪日団一行5名

7/30 「金沢少年の翼」北海道派遣研修団一行150名

8/4 S.ステン氏(スウェーデン考古学博物館骨学室長)

8/8 当館シンボルマークデザイナー 守分美佳、吉田秀夫両氏

8/29 海外農業研修生(網走開発建設部)一行14名

9/3 道政モニター一行27名

9/6 作家司馬遼太郎氏ら週刊朝日一行6名

9/11 千地万造氏ら日本生命財団一行3名

観覧者動向7月~9月

7月 6,557名

常設展示 5,310名

特別展示 1,247名

8月 9,722名

常設展示 6,162名

特別展示 3,560名

9月 4,574名

観光シーズンたけなわのこの3ヶ月間のべ2万人を超える観覧者を迎えました。7月21日から8月24日まで(30日間)開催した特別展も、1日平均160名と好評の内に終了することができました。

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (7月~9月)

7/20 苫小牧の梅木孝昭氏、松浦武四郎の足跡を追った写真展開催/D

7/28 木村英明教授(札幌大)、日ソ共同によるサハリン発掘調査開始/D

7/29 パシフィック・ミュージック・フェスティバル(札幌芸術の森)でウイльтаの音楽と踊りが披露/D

8/10 網走市立郷土博物館、郷土資料中心に展示一新/AB

8/10 北大で研究保管のアイヌ人骨を慰霊するイチャルパを実施/Y

8/15 北海道、アイヌ民族文化研究センター実現へ検討着手/D

8/21 北方民族博物館、ディスプレイ産業大賞優秀賞受賞/Y

8/26 道立函館美術館、「蠣崎波響とその時代展」を開催/Y

9/12 北海道開拓記念館、20年ぶりに模様替え(11~3月改修工事)/AS

9/16 札幌・豊平川でサケを迎え、神の恵みに感謝する儀式アシリチエップノミ(札幌アイヌ文化協会など主催)開催/D

9/21 '93年の国際先住民年に向け、北海道が推進会議を設置/D

*AS朝日新聞、AB網走新聞、D北海道新聞、Y読売新聞

*複数紙に掲載されている場合は、扱いの大きい方による。

編集後記

今回から、新コーナー「みんぞく・こうこ・はくぶつかん in Hokkaido」が登場しました。当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載しました。今後とも期待ください。

秋をむかえ、「友の会」の会員募集、シンポジウムの開催と大きな事業がいろいろあります。実多い季節となることでしょう。(佐々木)

Q インディアンやイヌイトの資料では、服をはじめいろいろなものにビーズが使われていますが、伝統的なものなのですか。

A ビーズが取り入れられるようになったのは、ヨーロッパ人との交易が盛んになった18世紀以後で、それまで装飾には、北方インディアンを中心に広い地域で「クイル」とよばれるヤマアラシの刺や鳥の羽軸などが用いられていました。染色されたクイルは、皮革や樹皮の上に縫い付けられたり、ベルト状のものに織りこまれたりしています。また、小さな皮をモザイク状に縫い付けた文様や刺繍は、イヌイトなどでも伝統的に施されてきました。これらのデザインは、幾何学模様が主流でした。

カナダでは、ハドソン湾を中心とした交易により、19世紀中頃までにはビーズと共に花柄のデザインも取り入れられ、ビーズ刺繍は、アサバスカ・インディアンをはじめ西へと広まってきました。

毛皮をはじめ多くの交易品を代償に取り引きされたビーズ。伝統的に精緻な装飾の技術があったからこそ、ビーズなどが受け入れられ、芸術的なまでに発展していったのでしょう。

(学芸課 齋藤 玲子)



女性用パーカ / イヌイト

'91.10~'92.1月の行事

・10/13 第4回講座
「オホーツク海沿岸の遺跡
—とくに擦文・オホーツク文化
について—

講師 青柳文吉(当館主任学芸員)
・11/3.6.7
第6回北方民族文化シンポジウム。
詳しくは下のお知らせをご覧ください。

・11/24 第3回講習会
「アイヌの衣服と文様」
講師 児玉マリ氏(アイヌ服飾研究家)

・1/12 第4回講習会
「北方民族の玩具」
講師 笹倉いる美(当館学芸員)

講座、講習会は午後2時より当館講堂にて開催します。参加は無料です。

「友の会」入会のご案内

「友の会」は一人でも多くの方に、北方地域の諸民族の文化を知っていただくための、「北を愛する」仲間の集まりです。

会員の特典

- ・季刊誌・友の会だよりの送付(それぞれ年4回。ただし平成3年度は2回ずつの発行)
- ・常設展示・特別展示の無料観覧
- ・事業開催の案内
- ・各種印刷物(展示解説書、研究紀要、特別展図録等)購入の際の価格引き

会費

- ・個人会員
今年度は2,000円
平成4年度以降は3,000円(年間)
- ・終身会員 50,000円
- ・法人会員 一口10,000円(年間)

入会手続き

- ・入会案内・申込書を用意しておりますので、「友の会」事務局にご請求下さい。
 - ・会費の払込みを確認後、会員証をお送りします。
- お申込み・お問合わせは、
(財)北方文化振興協会内
「友の会」事務局まで

〒093 北海道網走市字潮見313-1
TEL0152-45-3888

第6回北方民族文化シンポジウムのお知らせ

■講演会『北方民族の狩猟生活と北方動物』

講師：戸川 幸夫氏(作家)

日時：11月3日(日)午後6:00より

会場：網走市民会館大会議室(網走市南6条西1丁目)

■シンポジウム『定住と移動』

国内外より8人のパネラーを招き、北方地域における民族の移動と定住の在り方、および民族集団の分布域の変遷・要因の両面を比較検討し、生業活動と環境利用の関係を探り、北方への適応や民族移動の様々な要因を明らかにします。

日時：11月6日(水)、7日(木)ともに午前9:30より

会場：網走セントラルホテル(網走市南2条西3丁目)

入場は無料です。詳しくは当館にお問い合わせください。